

は、携帯の電源を切っていたので、正確にはわからないためである。ただ、握りこぶしをつくった腕を水平に伸ばし、そこからまたこぶしを目当ての星まで重ねていくと、こぶし6つ分ほど増えていた。ということは、どうやら4時間ちょっとは経っていたらしい。空中で握りこぶしを重ねて大真面目な顔をする日本人の女は、やはり奇妙だったかもしれないが、「空図」をすこし読めたような気がして、私はひとり、小さな満足感にひたって

いた。海は道で、空は地図である。佐渡のイカ釣り漁師や、バジヨの漁師のあの深い目は、この風景からどれほど多くのことを読み取るのだろうか。そんなことを考えながら、船上での夜は更けていった。

引用文献

- 長津一史. 2012. 『海民』の生成過程 インドネシア・スラウェシ周辺海域のサマ人を事例として 『白山人類学』 15 : 45-71.
内田武志. 1973. 『星の方言と民俗』 岩崎美術社.

声を上げる活動家たち

鶴 田 星 子*

2016年8月、3年ぶりにインド西部・プネーに降り立った。大音量のクラクションと排ガスの臭さは相変わらずだ。しかしそのようなことを思っていたのも束の間、街中に入ると見知らぬ建物が増えてくる。今回訪れたプネーは、ムンバイに次ぐマハーラーシュトラ州第二の都市で、文教都市としても名をはせている。

「おかえり！」旧市街地にある友人の家に到着すると、久々の再訪を家族が暖かく出迎えてくれた。この家族とはかれこれ7年来の仲である。「あれー！いつこっちに来たの！！」と隣近所に住む親戚たちも私に会い

に来てくれ、この日の晩は、会えなかった3年間の出来事を語り合った。

今回インドを訪れた目的は、このマハーラーシュトラ州における、ヒンドゥーとイスラムの関係について調べることだった。同州はインドでも宗教暴動発生件数の多い州であり、州都のムンバイでは2006年7月、そして2008年11月に死者100名を超す大規模なテロも発生している。そのような状況の中で、ヒンドゥーとイスラムが互いを憎むことなく、両者の融和が実現するよう活動している団体を調査することが私の目的であった。

プネー到着の翌日、私は調査に関する指導

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

を受けるためプネー大学に足を運び、そこでひとりの学生を紹介されることとなった。紹介してくれた先生によると、彼は歴史学科の院生で、ヒンドゥーとムスリムの対立の歴史について研究しているのだという。彼なら必ず私の調査を助けてくれるだろうから、ぜひ会ってみたらいい、とのことだった。私はインド入りしてからプネーに来るまでの2週間、今回の調査に関して何も手がかりをつかめず行き詰っていた。そのため、デオクマールという名のこの学生に会うことにより、私はこの後大いに助けられることとなる。

彼と会えたのはその1週間後のことだった。彼は時間をしっかり守る生真面目なインド人で、日本人である私がインドの宗教対立に興味をもっていることを不思議そうに、しかし嬉しそうに話を聞いてくれた。そして彼は私の調査がうまく進んでいないことを察知し、「週末にボランティア団体やNGO団体の関係者が集まるイベントがあるけど一緒に行く？」と誘ってくれたのだった。私は藁にもすがる思いで詳細も聞かぬまま、連れて行ってもらえるよう即座にお願いした。

数日後、イベント会場に着くとそこには大勢の人々が集っており、ヒンドゥー・ナショナリズムを批判した書籍販売や、著名な活動家による講演などが行なわれていた(写真1)。私はこんなにも盛大なイベントに誘われていたにもかかわらず、誰とどのような話をすれ



写真1 屋内ホールでの講演会の様子

ばいいのか分からず右往左往するばかり。そんな私をデオクマールは、「インド各地（主にマハーラーシュトラ州）から活動家が集まってきているから、コネクションを作るいい機会になるよ」と励まし、親切にも数人の活動家を紹介してくれ、後日彼らのオフィスに訪問できるよう取り計らってくれた。彼が見ず知らずの外国人の私にここまでしてくれることに、感謝の言葉しかでてこなかった。

このイベントは、2013年8月20日にヒンドゥー・ナショナリストによって殺害された、著名な合理主義者（rationalist）であるナレンドラ・ダボールカル氏¹⁾の追悼式典であった(写真2)。これは、毎年彼の命日に合わせて催されているのだそうだ。式典の大きさが、亡くなってもなお彼の影響力が強いことを示していた。また式典の後には旧市街地の中心部に移動して、彼の死に対する学生のデモが実行された(写真3)。

ところでただの院生だと思っていたデオクマールがなぜこのような活動の存在を知って

1) Maharashtra Andhashraddha Nirmoolan Samiti (MANS, マハーラーシュトラ州における迷信を撲滅する委員会) を設立。彼の死後1週間で、The Maharashtra Prevention and Eradication of Human Sacrifice and Other Inhuman, Evil and Aghori Practices and Black Magic Act, 2013 (マハーラーシュトラ州における生贄、悪とアゴリーの儀礼、黒魔術の禁止・撲滅法 2013) が制定された。



写真2 ナレンドラ・ダボールカル氏



写真3 学生によるデモ活動

いたのだろうか、これにはわけがあった。実は彼自身、学生運動の団体に所属する活動家だったのだ。彼は、自分はアンベードカリスト²⁾であると言い、ダリトの出自をもつ新仏教徒であるとのことだった。「プネー大学の学生ってこういう活動に熱心だったんだね、全然知らなかった！」と言うと彼は誇らしそうに笑っていた。不遇な現状を嘆くより、それを変えるために自ら声を上げ、活動しなければならない。そうやって實際行動に

うつしている若者が予想外に多かったことに、私は感銘を受けた。

「明日以降僕は一緒に行動できないから、ひとりでもうまくやるんだよ。今日連絡先を聞いた人全員にアポをとるんだよ！」と、不安そうにしていた私を、彼は最後まで叱咤激励してくれた。またそのように日々奮闘している彼の姿は私に勇気を与えてくれ、彼に恩を返すつもりで、その日会った数人に早速アポをとった。

追悼式典への参加から数日後、デオクマールが紹介してくれた活動家のひとりである、シャムスッディン・タンボリ氏が教鞭を執っている大学を訪れた。彼はその後さまざまな活動に私を同伴させてくれ、私の調査を力強くサポートしてくれた。彼はプネー大学付属カレッジで英語学の教授という肩書をもちながら、Muslim Satyashodhak Mandal (MSM, 真理を探究するムスリムの会) という団体の代表を務める人物である。この団体は1970年にハミッド・ダルワイ氏によって設立され、現在は、異宗教間結婚への支援活動を中心に、宗教間の融和を説く講演会やイベントなどを頻繁に開催している(写真4)。先日の追悼式典では、友人であるという警察署の人々と一緒にいたためか、はたまた恰幅のよい体格のせいか、いかにも威厳に満ちており近寄りがたかったのだが、実際には非常に親しみやすい人柄であった。

「私はムスリムだけどね、信じているのは

2) マハール・カースト(ダリト、不可触民カーストのひとつ)出身でインド初代法務大臣になったB.R. アンベードカル博士の名前に由来。彼はカースト制度を痛烈に批判し、反バラモン運動を展開し、マハーラーシュトラ州ナーグブルにてヒンドゥー・ダリトの仏教徒(新仏教徒)への集団改宗を実行した。



写真4 MSM主催の講演会

ヒューマニティーだよ。つまり私はヒューマニストだ。」「ヒンドゥーもムスリムも、1割はとても善良な人たちでもう1割はとても邪な考えをもつ人たち。残りの8割の“普通の人たち”が悪い方に流されないよう、私たちは活動しなければならないんだよ。」

学食で一緒にチャイを飲みながら、彼はこのようなことを言っていた。彼自身ムスリムでありながらこのような活動をしているために、同じムスリムからも敵対視されている、とも語っていたが、彼の目には強い決意が満ち溢れていた。

今回出会えた活動家のほとんどが、デオク

マールのような新仏教徒やタンボリ氏のようなムスリムであった。そして彼らの多くが自らを特定の宗教にとらわれない、アンベードカリストやヒューマニストと名乗り、ヒンドゥー至上主義に抵抗するという共通の目的のため、宗教の違いを超え協力し合っていた。しかし一方で、多くの一般市民はヒンドゥーの伝統・文化に基づいて生活している。実際に、長年お世話になってきた先述のヒンドゥーの家族に聞いても、「ムスリムの友人もいないし、ムスリムのことってよくわからないな。そういう人がいるんだね」という反応だった。市井の人々と、声を上げる活動家との意識の差は大きい。タンボリ氏のように、このような「8割の“普通の人たち”」にどのように宗教間融和に関心をもってもらえることができるか。活動の浸透には時間を要するが、それが今後の大きな課題なのではないだろうか。

暴動の記憶

宮 園 琢 也*

インドでの調査

2016年8月2日から9月20日にかけて、ニューデリー、ウッタル・プラデーシュ州ム

ザッファルナガル、シャームリーにてフィールドワーク調査を行なった。インドでは宗教対立から生じる暴動が頻発している。その際

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科